

## 『学校』って 必要なの？

このような疑問を かなり多くの方が抱いておられることと史料している次第です。

また 当方の友人の第二子が小学校低学年時に当方に『どうして勉強しなければならないの？』との質問をしたことを記憶しております。この質問に対して なにをどのように返答したかについては 本稿最後に開示させていただくこととします。〔なお この第二子は現在では一児の母親です。〕

当方は 『教育機関としての学校』は知識を伝授するためだけのものではない との見解です。

この見解を得た契機は 清水幾太郎氏の著書『社会的人間論』を学生時代に教材として接したことに始まります。

受講時の記録などを基に《学校とは何ぞや》について展開することとします。

また 著書本文を掲出しますので 各位のご検討をお願いします。

なお 当方の接した著書は 旧字体での旧仮名遣いによるものですので 各位には新字体による現代仮名遣いで改版された著書をご提示します。

前置きが長くなりました。 本論に入ります。

● ヒトは《遊び》を通じて成長するものであること には他言を俟ちませんね。

小学校の授業時間と授業時間との間に設けられる《休憩時間》は 低学年の児童にあっては就学前の《現実の生活における遊戯》そのものの時間となり得るのですが 待ち受けているのは次の《厳肅》というべき授業時間です。

成人となる過程において この生活上での《遊戯からの転換》を学ぶ必要があるのです。

※【著書 P.54 (三) 参照】

〔当方註〕学級崩壊の事象が顕著になっている背景には この《学ぶ》ということの指導が十分に機能されていないのでは との懸念をしています。

● 著書からは 個々の児童の評価は《絶対的によるものではなく 相対的に行われるべき》であり 例えば『数値』などに頼るべきものでないこと が読取られます。

※【著書 P.41前段『すなわち「できうるかぎりすべての児童を行動および思想の社会的な型に自ら進んで一致させることのできるような存在に変化させる」ことが必要なのである。』参照】

〔当方註〕当方の小学校時代（昭和20年代後期～）は 著書記述内容と同様に数値的評価はされていませんでした。

現代社会活動上での客観的評価のための数値化とは 考察の根幹が全く異なるものであることに留意が必要となりますね。

● 学校教育と家庭教育との相互関連について触れます。

人格形成は生誕以前から始まっていると謂われています。

成人となる過程において 社会人として共通に必要とされる知識を 各種の『学校』を経過することによって培うこととなるのですが 家庭教育との対比が生じます。

著書から 人格形成には学校教育が唯一であるとは謂えない ことが読取られます。

※【著書 P.57中段～P.58中段『家族集団、遊戯集団、……（中略）……このような例は限りなく増加することができる。』参照】

〔当方註〕従前からの言い伝えである『子は親の背中を見て育つ』ことを具体的に表示されているものと思料します。

また 日常交流のある中学校の《一生活担当教諭》の見解は上記に同様であることから 生徒指導上での困難性を窺がわせるものです。

● 明治時代に創設された 我国の《教育制度》と同時代の欧米の『社会教育』との差異をご提示します。  
※【著書 P.44末尾部～P.46中段『しかしながらここに看過し得ないことは、……（中略）……これと反対に社会教育はその社会に対する重要性から出発していると見ることができる。』参照】

◆ 清水幾太郎氏の主張は《個人はその生存している基礎社会によって育まれるものであるが その社会は所属する個々人によって支えられているものである》との見解によるものです。

- ・ 清水幾太郎氏主張の詳細は 別途掲出の日高六郎氏による《解説》をご参照ください。

◎ 冒頭に記載の当方の対応は

- ・ 義務教育では 日常生活上の最低必要限の知識 を伝授するものであること
  - ・ 伝授された知識で 一命が救われることがあること
- の二点を伝えました。 が 果して彼女が記憶しているかどうか……